

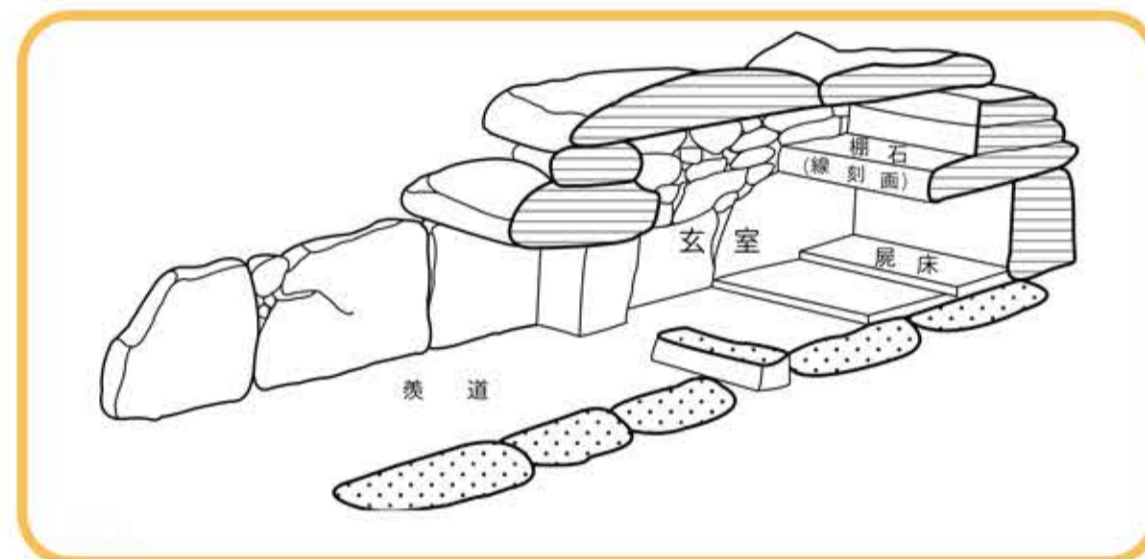
大分の史跡—千代丸古墳—

ちよまるこふん かく みやぞの よこあなしきせきしつ
千代丸古墳は、賀来川中流域の左岸の宮苑に位置しています。7世紀初めの築造と考えられ、その横穴式石室は巨石が積まれています。市内
ゆいいつ そうしょくこふん
では唯一の装飾古墳として、昭和9年(1934)に国の史跡に指定されました。

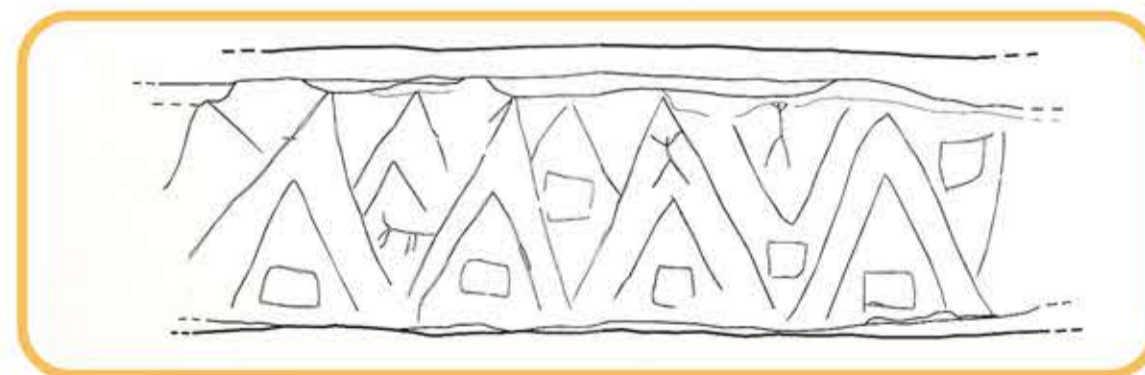
線刻された石棚

南に開口した石室は、長さ約8.9mと市内最大規模で、死者を埋葬する玄室とその入り口
の羨道部からなっています。玄室は奥行約3.3m、幅約1.9m、高さ約2.8mの広さがあり、その奥には死者を安置した石棺が置かれていたと思われます。

この古墳の最大の特徴は、玄室の奥から水平に突き出した棚状の石にあります。厚さ約50cmのこの石の前側面は平らに加工され、そこに
たてあな
縦穴住居と思われるものや、人物、獣類等が
せんごく
線刻で描かれています。さらに、玄室内部全面に赤色顔料が塗られています。



横穴式石室模式図



線刻実測図



横穴式石室の内部(歴史資料館展示模型)



現在の千代丸古墳



千代丸古墳周辺地図

地域首長の墓

現在墳丘は封土の大半が流出して、全長約11m、高さ約4.5mとなっていますが、築造当時は全長約25mの円墳であったと考えられます。

市内で横穴式石室をもつ古墳はこのほかに、丑殿古墳(賀来)、弘法穴古墳(永興)のみであり、ともにその規模や構造から大分平野を代表する首長墓と考えられます。